

伊豆長八の漆喰鑊絵



こてえあまのうずめのみことこうせきず
鑊絵天鈿女命功績図

寄木神社（東品川1-35-8）

にのこる鑊絵天鈿女命功績図は、幕末から明治にかけて活躍した左官の名工、伊豆（入江）長八の作品として知られ、区の文化財に指定されています。

図では、右扉に猿田彦命、左扉左下に天鈿女命を描いています。古事記では天孫降臨の際、行く手を阻む猿田彦に天鈿女命が胸をあらわに微笑みかけ天孫の道案内をさせるくだりがあり、その場面を描いたものと思われます。天鈿女命の右上に描かれているのは、その場面とすれば邇々芸尊（男神）ということになりますが、図柄では鏡・剣・曲玉の三種の神器を持った（曲玉の部分は剥落）女神に見えることから天照大神とも考えられています。この像は顔の部分が



▲ 猿田彦（部分）



◀ 天鈿女命（部分）

◀ 鑊絵天鈿女命功績図（寄木神社） 右扉 167.5×37.2cm
左扉 168.3×57.5cm

剥落してしまい、残念ながら当初の姿を留めていません。なお、三島市龍沢寺蔵の「天孫降臨図」（明治11年）にも三者がほぼ同構図で描かれています。天鈿女命については、長八はこれ以外にも多数制作しており、好みのテーマであったことが伺われます。天鈿女命は民間信仰で、その乳に触ると乳の出がよくなると言い伝えられており、寄木神社の天鈿女命も多くの信者に触れられ変色しています。

猿田彦命は比較的破損も少なく、当初の迫力を伝えています。左右カーブを変えて調整された玉眼や、鑊で丹念に刻まれた筋肉や皺の上に一本一本書きこまれた髭や体毛は、臨場感を醸し出しています。明治の彫刻家高村光雲が「伊豆の長八は江戸の左官として前後に比類のない名人であった」と評したというその技量が、この作品にはっきりと見ることが出来ます。

名匠伊豆の長八

長八は文化12年(1815)、伊豆半島の南端松崎町に生まれました。12歳より左官の仕事を学び、19歳で江戸へ出ます。21～25歳頃にかけて、谷文晁たにぶんせうの高弟喜多武清に狩野派の絵画を学び、研究を重ねて、単なる壁塗り技術の域を超えて三次元的な漆喰しっくい芸術を作り上げることで新境地を開きました。即ち、平らに塗った漆喰壁画に、さらに漆喰を薄く盛り上げて図案を施し彩色した漆喰鏝こてえ絵や、漆喰を使って彫像をつくる漆喰彫刻といわれるものです。長八は、漆や膠を用いることによって脱色を防ぎ、漆喰の上に筆による自由な彩色を可能にしました。それでも、



乾き具合を見極めながらの彩色はかなりの技量を要するものでした。天保12年(1841)、27歳にして日本橋茅場町の薬師堂向拝柱の龍を手がけ(後に消失)、伊豆の名工長八(通称伊豆長八いずのちやうはち)の名が一躍江戸の評判になってから、明治22年(1889)、75歳で亡くなるまで、江戸

◀ 入江 (伊豆) 長八



▲ 善福寺本堂部分

と伊豆を中心に数多くの作品を残しました。

明治5年(1872)、長八は貸座敷相模屋から要請を受けて品川に赴きます。この時期、長八は品川に集中して作品を制作しています(下表参照)。また、妓楼松登(松岡か)楼にて、長八の身辺の世話をした女中おはな(芸妓だったとの節もある)は、後に長八の後妻として迎えられます。

長八の作品は建築物の装飾が主流であったため、東京に数多くあった作品のほとんどは関東大震災や戦災で消失してしまいました。都内では、寄木神社の他に足立区橋戸稲荷神社本殿扉の狐図が、残存する貴重な長八作品として区の文化財に指定されています。なお、彼の作品は、出身地伊豆松崎町の浄感寺(長八記念館)や長八美術館に多数展示されています。

品川における長八およびその門下による鏝絵作品一覧 (いずれも明治5～6年)

場 所	作 品
土蔵相模(北品川1丁目)	「魚之図」他(土蔵正面壁面)〔消失〕
寄木神社(東品川1丁目)	「天鈿女命功績図」(本殿土蔵作扉前)〔現存〕
善福寺(北品川1丁目)	「龍」(本堂正面欄干)、「唐獅子」(木鼻左右)、「菊花と若葉」(正面虹梁)、「昇り龍 下り龍」(左右壁画)〔現存。但し、剥落多い〕 ※「菊花と若葉」は門人善吉との合作とも伝えられる。
袖ヶ崎神社(東五反田3丁目)	「素盞鳴尊大蛇退治図」(本殿土蔵作扉前)〔消失〕
松登楼(北品川1丁目) (松岡か)	「牡丹に唐獅子」(張見世格子上欄干?)、「流れに亀」、「鶴」(座敷小壁面)〔消失〕 ※ほとんどは門人の作で、長八は肝要部分と監督指導にあたったという説もある。